瀬戸内の困ったガキ

坂田明

晶文社

著者について
坂田明（さかた・あきら）
一九四五年、広島県呉市生まれ。広島大学水畜産学部水産学科卒業。ジャズ・ミュージシャン。七二～七九年、山下洋輔トリオに参加。現在は「MITOCHONDRIA」を率いて活動するほか、アイヌ詞曲舞踊団モシリのレコーディング&ツアーにも参加。ハナモゲラ語の創始者としても知られ、映画、舞台などでも幅広く活躍。淡水の生物に造詣がふかく、ミジンコ好きはひろく知られている。
著書に『ミジンコの都合』（共著、晶文社）、『混同夢狂走曲』（河出書房新社）ほか。

瀬戸内の困ったガキ
一九九四年八月一〇日発行
著者　坂田明
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二－一－一二
電話東京三二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替東京六－六二七九九
堀内印刷・美行製本
© 1994 Akira SAKATA
Printed in Japan
Ⓡ本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇一―二三八二）までご連絡ください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

瀬戸内の困ったガキ

坂田明

晶文社

父母に。先に逝った兄妹たちに。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瀬戸内の困ったガキ　もくじ

少年時代　11
海の記憶　16
オンリーさん　23
伝馬船を所有する小学生　28
犬がさかっちょる　33
田植えのヨロコビ　39
タンスのなかの風船　44
フグ喰った三毛猫のミー　48
ウンコが出たんじゃ　54
ピッカピカの自転車　59

オフクロ海に落ちる　65
台風に興奮する少年　71
祭りだ祭りだ　77
腹巻にドス　82
兄さんのたのみごと　87
風呂はアリガタイ　92
野山や河や海やら　100
上からながめる水族館だもの　104
息子の音を嗅ぎわけたオフクロ　109
ハーモニカと入れ歯　113

采夏子先生にもらったもの　121
性格は焼かなきゃ治らない　127
石臼の一輪車と歩く冷蔵庫　130
お母ちゃん、腹へった！　135
父方と母方　143
初恋　148
沖から見た長浜　154
あとがき　159

瀬戸内の困ったガキ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブックデザイン　日下潤一
写植印字（カバー・扉・帯）　前田成明
本文イラストレーション　荒井良二

少年時代

僕の少年時代のできごとは、いまになって思えばそのすべてが自分にとってかけがえのないすばらしい財産であった。財産のなかにはいいものも悪いものも、ワケのわからんものもあり、そのグジャグジャのすべてという意味での財産だ。なぜなら、自分の現在は自分の過去の上にしか成り立たないからである。

広島県呉市、その市街から山を二つ越えたところに僕の故郷がある。前には瀬戸内海の島々、手漕ぎの漁船から、焼き玉エンジンをつけた漁船、機帆船、内海航路の汽

船、進駐軍の艦船、じつにさまざまな船が瀬戸の海を往き来する。

村はすぐうしろに山を背負い、人口は三千人ほど、きょうもあれば明日もある、というのどかさであった。その村の名は長浜。

四季折々の風景のなかには敗戦後の貧乏な時代を生きる人びとの広島弁がとびかった。

オヤジはオフクロとの結婚がじいさんの逆鱗（げきりん）にふれ、それがもとで二人そろってサカタという家の養子となった。だから、僕にはじいさんとばあさんが三人ずついたのである。両親は養子にいったけど、養父母とはべつに世帯をもっていた。養父はもともと海運業をいとなみ、北九州から石炭を運搬しておったらしいが、敗戦後は陸上にも進出し、坂田組（といってもヤクザの方面ではないですよ）と名前のはいったトラックを二台、オート三輪も一台もっていた。朝、運転手のおじさんがくると、木炭車の荷台最前部のボイラーに火をおこして、うちわであおいでいた光景が目に浮かぶ。

当時の省営バス（国鉄バスなのだが、ばあさんたちは相変わらずこう呼んでいた）

には、後部に炭俵を積んで走っているのがいた。まったくなつかしいかぎりだ。

オヤジは養父のトラック一台を借金して買い、それで自立の方向へむかって働いた。勘当される前は広島県で三位になるほどの乳牛を育てたこともある、酪農家を目指した頑張り屋の青年だった。

僕の知ってるオヤジは運送屋で百姓のせがれ、勤勉実直、小心石頭無学、頑固一徹、自分の井戸を死ぬまで自慢したい善良な瞬間湯沸かし器的殿様ガエルであるが、オフクロの妹に聞くと、「あんたのお父さんはねぇ、おねぇちゃんに会いにくるのに乗馬服着て馬に乗ってきとったんじゃけん。そりゃあカッコえかったわいねぇ」てなことになる。ああ、体中がかゆくてたまらん。にもかかわらず、少年にとっては、呉の市電の終点である長浜港でトラックに乗るオヤジはカッコえかった。

冬の朝、暗いうちに起き、二合ビンのはいった袋をぶらさげてオヤジの実家へ牛乳をもらいにいく。村の道は坂や石段だらけだ。提灯のうすあかりをたよりに少年は歩いた。

なんであんなに忙しい家だったんだろう、僕の家は。中学から高校へ進むにつれ家の手伝いはどんどんふえていく。畑仕事、水くみ、薪割り、山の雑木の伐採、飯炊き、風呂炊き、トラックの助手と人夫など、なんでもあり。

こうなったら、ザマーミロー、と叫ぶのだ。ガスもなければ水道もない、えーい文句あるかー、風呂炊きながら勉強するぞ、うんこしながら英単語おぼえてやらい、こちとらイデッケだい。便所のくみ取り、はいやりましょう。中身はちがえど天びん棒でかつぐのは水くみとおんなじだ。

一度だけだが、ホルスタインのオスの子牛を一頭、肉牛に育てた。中二のときだ。毎朝五時起きで牛の世話をし、学校から帰ってからは草刈りの合間に昆虫採集に行き、軟式テニスもしたし、海で遊んだ。なにせ、家の前が海。夏には毎日海遊びができる。学校へ行くのだって伝馬船(てんません)こいでいけた。休憩時間には先生もいっしょに伝馬船で遊べるなんて最高だった。よそのミカンやクリをとりにいっては先生に殴られた。痛かった。

鉱石ラジオで北京放送やモスクワ放送をワクワクしながら聞き、放送局からくるベリ・カード、クリスマス・カードや本がものすごくうれしかった。僕はうそつきで素直なおっちょこちょいだったのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com